やぶうぐいすこいのえだみち

藪鶯恋枝道

〔解　説〕

河竹黙阿弥が実話に基づいて書いたとされる、慶応三年江戸市村座初演の歌舞伎「契情曽我廓亀鏡」の「小磯ヶ原雪降りの場」を元に、明治時代に東京で活躍した竹本和国太夫が義太夫節に改作しました。人形浄瑠璃文楽では上演されることはなく、女流義太夫によって現在に伝えられ、人形芝居としては相模人形芝居長谷座のみが継承しています。

〔あらすじ〕

奥州屋の子飼いの手代礼三郎は、女芸人のお静と恋仲になり、息子千代松をもうけました。しかし、奥州屋主人宗右衛門の娘が礼三郎に恋し、恩に背くことの出来ない礼三郎は娘の婿となります。仲を裂かれ残されたお静は、悲しみのあまり泣き暮らして盲目となり、千代松と二人不自由な暮らしをおくる中、見えぬ目を治そうと、眼病に霊験があると言われる小磯ヶ原の日朝様（本覚寺）に願掛けをします。その満願の日、お静は小磯ヶ原で雪に降られて持病の癪でうずくまってしまいます。幼い千代松が健気に介抱していると、そこへ礼三郎と舅の宗右衛門が通りかかります。礼三郎に気付いた千代松が「とゝ様」と呼びかければ、宗右衛門はこれは己が娘可愛さに仲を引き裂いた親子、と全てを悟って涙します。礼三郎を残し先に行く宗右衛門と、お静千代松との再会を喜びながらも主への義理に縛られる礼三郎。父親を引き留めようとする千代松の声も虚しく、礼三郎は親子を残し去って行くのでした。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

小磯ヶ原の段

降りしきる。

雪に往来も長縄手、小磯ヶ原の田も畦も皆白妙に今日は猶、かかしの蓑も総毛立つ。哀れやお静は二世かけし、夫に別れ泣き明かし、頼む小影も七つ子を杖にとぼとぼ歩み来て、一息ほっと、

「コレ千代松。この中から雪模様、積もったとは聞いたれども、この様に降ろうとは思わぬ故。傘も持たずに出て来たが、大層雪が積もったかや」

「アイいつもの大きな地蔵様が、真っ白になったわいのう」

「そんならここが小磯ヶ原か。わしはこの目の願掛けに裸足参りも苦にならねど、そなたはさぞ寒かろうのう」

と訊ねに千代松おとなしく

「イエイエわたしは寒うはないけれど、お前のその目が見えぬ故、わしゃそれが悲しいわいのう」

「オオよう云うてたもった。よう云いやった。よう云って給ったのう。道に欠けたるいたずらをなしたる故かこの様な生れもつかぬ盲目となり、艱難辛苦も親の罰。それにひき替え礼三様、去る者日々に疎しの喩、そなたの事も打ち忘れ御主人様の娘ごと、仲良う暮らしていさんしょう。思えばこちら親子ほど因果なものがあろうかいのう」

と母の歎きに幼子が

「コレ母様。父様が御座んしたらこんな難儀はあるまいもの。早う戻って欲しいなあ」

「オオ尤もじゃ、道理じゃ〳〵道理じゃわいの。添うに添われぬ、浮世の義理。わしが心の切なさを推量し

てたもいの」
と数え立てたる憂き涙。余所の見る目も哀れなり。せぐり苦しき胸先へ、俄に差し込む持病の癪。
「アイタ〳〵」
「コレ母様、お前はどこぞ悪いかえ」
「サイノウ折の悪い持病の癪が。アイタアタ」
「そんなら行くのはよしにして早う内へ戻ろうわいの」
と泣く泣く母の後ろへ廻り、か弱き力の撫でさすり介抱如才長縄手。又も降り来る雪道を、一杯機嫌の高調子。
「ここは追分枡形の茶屋でよ、泣いて別れた事がある」
鼻歌交じり雲助が、息杖かたげ、千鳥足。行き過ぎしが、立ち止まり、
「ヨウなんだ〳〵。見りゃ可愛らしい子供と女。オイ姉や。このマア雪の降るのに、そこに何をしているのだ」
「アイ母様がお腹が痛いので歩くことができませぬ」
と云うもおろおろ泣いじゃくり。お静は苦しき息をつぎ、
「ご覧のとおり、目を患い笹目ヶ谷の日朝様へ今日で七日の満願故、出ました途中でこの大雪。ちと訳あって夫に別れ、色々辛苦のその上に、肌も薄着にこの雪風。冷えますせいか持病のつかえ。アイタ〳〵。私は少しも厭いませねどこの子が寒うて堪るまいと、いじらしうて成りませぬ」
と云う声さえもふるわれて、歯の根も合わぬ親と子が、身の成り果てぞ哀れなり。雲助思わずもらい泣き。
「アヽそりゃさぞ困るだろう。可愛そうに癪だというに体へ雪が積もっちゃ、どうして〳〵堪ったものじゃ

ねえ。と云ったところで木陰はなし。ハテどうがな」と胴中へしめたる縄の帯とくとく。破れ合羽を脱ぎ捨てて

「コレ姉さん。この桐油をひっかけて、暫く我慢する内にゃ、雪も小止みになるであろう。アヽよって愚痴を云うようだが俺も酒故だらむくり。国へ女房と子供を残し、この鎌倉へ出掛けた後は百の銭も送らねえから、さぞや後にて女房子が困って居るであろうと思や、こんた衆二人を見るにつけ、おら涙が〳〵」

と身につまされて鬼の目に溢す涙ぞ殊勝なり。お静は泣く泣く手を合わせ、

「ご親切なそのお詞。何とお礼を申そうやら。有難うございます」

「アヽコレサ〳〵何のお礼に及ぶものか。裸で生まれてこの歳まで裸で暮らす雲助だ。酒せえ飲みゃ寒さ知らず。しかしマア哀れな話を聞いたので、呑んだ酒が理に落ちて雪の冷てえのが知れてきた。ドリャ冷めねえうちに出掛きょうか」

と裸百貫御伝馬の問屋場さして急ぎゆく。

尽きぬ縁を白妙の雪踏み分けて礼三郎、舅と共に大師の戻り、吹雪に傘を取られじと、通りかかりし小磯ヶ原。千代松は目早く見つけ、

「コレ母様。父様が御座ったわいのう」

と聞くにお静は飛び立つ嬉しさ。我を忘れ立ち上がる。礼三は思わず振り返り、

「ヤアそなたはお静」

と云わんとせしが舅の手前、見て見ぬ振りの気扱い。千代松傍へ走り寄り、

「コレ父様、お前が戻りゃしゃんせぬ故、毎日〳〵母様が泣いてばっかり居やしゃんして目が見えぬよう

になったわいな」
と袖に取りつき縋りつく。礼三は二人がなりかたち、見るにつけても我故と、涙は胸にせきのぼる。人目を包む唐傘の骨も砕くる思いなり。三人が様子見て取る舅、浮かむ涙を押し隠し、
「そんならあれが噂に聞いた小町お静がなれの果て。さては礼三が。イヤコレ礼三郎。歳を取ってはとんとやくたい。この間から逆上せのせいか耳は遠なる、目はかすむ。傍で人が話をしても、おりゃモさっぱりと聞こえぬわい。イヤその聞こえぬで思いだした。この先の山谷に、良い灸点があるとのこと。それを尋ねてすえてもらい、堀から船で去ぬるほどに、そのそなたは後で積もる話。イヤサ雪の積もらぬその先に、早う内へ去んだがよいぞや」
「ハイ左様なれば、あなた様には」
「オウノウ。灸がすえとうなったのも、可愛い娘が恋煩い。よんどころなく生木を裂き、二人が仲の皮切りに縁切らせたも我が子が可愛さ。伊吹もぐさが吹きざらしの小磯ヶ原に行き悩み、唐傘灸の傘さえも持たぬ親子が浮き難儀。さぞや困るであろうと思えば、すえぬ先から思い過ごし熱い涙をこぼした」
とそれと云わねど宗右衛門、急に装えて泣く涙。又も振り来る雪吹雪、杖を力に別れ行く。
後ろ姿を伏し拝み、礼三は傍に走り寄り、
「コレお静」
「礼三さん」
「オヽ坊よ」
「父様逢いたかったわいの」
「オヽ尤もじゃ」
「逢いとうござんした」

「オ、道理じゃ」
「逢いたかった」
「尤もじゃ」
「逢いとうござんした」
「道理じゃ〳〵〳〵〳〵」
と右と左に妻と子を抱きかかえて諸共に暫し涙にくれけるが、礼三はようよう涙を拭い、
「ア、数えて見れば七年後。ふとそなたに馴れなじみ、子まで成したる仲となり、お静礼三と読売の小唄に唄われ鎌倉中、ぱっと浮名が立ちし故、店にもいられずこの春中そなたの小屋に掛人。親とは云えど朝夕に、一つにいたもわずかの内。コリャ千代松、よう忘れずにいてくれたのう」
「サレバイナ、例え僅かのうちにもせよ、そこが親身の親子中。昼は遊びに身が入って、紛れて暮らせど夜に入ると、泣いてばっかりいる故に今に父様は戻ってじゃとだまして寝させど現にも、又思い出してはしくしくと、泣く此の子より、傍に居る私が心の苦しさを、推量して下さんせいな。思いがけのう今日ここで巡り逢うたも日朝様へ、お願い申したご利益と、悦ぶ甲斐も情けない。小町お静と人毎に云われし我名も皆前表。果てはこの身を野ざらしに、卒塔婆小町の色さめて、鳥や獣の餌食となり、身を喰い裂かれ憂き恥を、晒すも定まる因縁づく。約束事と諦めて、二世と誓しその人に、添うことならぬ悲しさを不憫と思うて下さんせ」と聞くに礼三は胸せまり、
「オ、その歎きは尤もじゃが、何をいうにも子飼いからご恩を受けし宗右衛門様。家出をしたるその後で、もしや娘に凶事でもあっては。女房といえど元はお主。取りも直さず主殺し、これも捨つるに捨てられず、翅(し)

鳥（ちょう）にかかる礼三が苦しみ。アア浮世に義理がなにならば、埴生の小屋に住むとても、親子三人一ツ家に破れたる垣の隔てもなく、藪鶯に起こされて、蛙の声に燈をともし、郭の騒ぎを寝耳に聞き、気兼苦労も中田圃、それも田の畦枝道と別れ別れに成ると云うも思えば儚い浮世じゃなあ。推量してくれ、コレお静」

と夫婦手に手を取り交わし、我子を中に三人が、今降る春の雪溶けて、流す涙はみなぎりて、七里ヶ浜に打ち寄する波に波増す如くなり。

折から響く遠寺の鐘。

「ムーアリャもう入相。春とは云えどこの様に、雪の降るほど寒い故、コレ、決して心は変わらぬ程に、しばらくの間別れてたも。礼三が便りをするならばその時こそ親子三人世間晴れて暮らそうほどに、わずらわぬ様に気を張り詰め、おれが便りを待って居や」

「ハイそのお詞を聞きまして、私しゃ死んでも本望でござんす。どうぞあなたもお達者で」

「イヤイヤおりゃ父様は帰しゃせぬ。どっこへも往て下さんすなや」

「オヽ可愛やのう。ここに居たいは山々なれど、今云う通りの訳なれば、むごい親じゃと思わずに大人しう待っていてくれよ。お静さらば」

と思い切っても恩愛の、血筋の絆行き悩む、空には雪の降りしきる。

「父様いのう〳〵父様のう」

と呼ぶ声も次第〳〵に遠ざかる。見送るお静千代松が親子夫婦が憂き別れ。見えつ隠れつ、行く末や。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。